

追悼——高野秀男氏（昭19）

高野秀男君のこと

松下 順吉（昭19）

去る十月十七日（日）の昼前、同期会員の高野のご子息（次男）からはじめての電話を頂いた。「父が前日の十六日に亡くなった」とのお知らせであった。それも三日程の入院で急逝なされた由。全く突然の悲報にはどうにも合点がいかなかったので、「高野秀男さんが亡くなられたのですね」と訊ね返したことである。電話機をおいてからあらためてこの処の彼との接触のあとをずっと辿ってみても、こんなに急に亡くなられる様なことには全く思い当たる節はなかった。

予科からのクラスメートでもあったので、彼とは針葉樹会の会合の外に月例のミニ・クラス会があつて年に七、八回は会う機会があつた。彼もこの会合の常連だったので殆ど毎回顔を合わせていた。現に亡くなる二ヶ月



左より高野、大塚武、根本大の各氏（昭和14年9月、北岳頂上にて）

前の八月四日の例会にも彼は姿を見せて、全く普段と変わりなくその日出席した六人のメンバーと和やかに二時間余り歓談の時を過ごしている。

我々の年代になるとこう云つた会合ではお互いの病気の話が出る事が多いが、高野は今迄自分の身体のこと病気のことを話題にしたことはなかったもので、格別印象に残ることもなく再会を約して別れた。

あとで伺うと、彼は昨年十二月には既に胸部疾患の宣告を受けていたそうである。とすると、それから九カ月余り彼はどのような気

持で過ごしていたのだろうか。その間の我々との付き合いは何だったのだろうか。高野のお子さんすらも最近までご存知ではなかったとのこと。

彼は間近に終末期を迎える宿命に独り耐え、しっかりと向き合つて過ごしていたのだろうか。追慕の念とともに哀しさ切なさがかみあげてくる。

「じゃあ、あらためてさようなら！ 高野！」

もう今からは二十年以上も昔のことになる。私達が五十歳代後半に近づいた頃、高野の母堂はまだご存命ですでに超高齢の域に達しておられた。加齢現象として年と共に、食事、入浴、排泄のお世話は高野の奥様の負担を重くしてゆくことになる。更に悲しいことに痴呆の症状が加わり記憶の喪失、時ならぬ徘徊などで周囲を困らせ、奥様も高齢の身でその介護に忙殺され、困憊を覚えられるようになった。それをみかねて高野は五十歳代で一切の仕事から身を引き、奥様を扶けて母堂の最后を看取られた。

このときのご苦労のあと、間もなく奥様は咽喉の腫瘍治療の長い闘病生活で入退院を繰り返されるようになり、こんどは付添い、看護、送り迎えに高野が献身することになる。屢次

の難しい手術を経て、ようやく落ち着いて自宅療養に戻られるようになったが、奥様は口からは食事を摂れない状態になっておられた。

それから二十年、高野は休みなくミキサ―を使って食餌を調整するようになった。昼間短時間の会合、用件もかなり抑えて長く奥様の傍らをはなれることはなかった。ミキサ―でつくる食餌は「とても食べられたものではない」と洩らしていたことがあったが、彼はその食餌を共にしていたのかもしれないと思った。

今その奥様をおいて足早に逝ってしまった彼の心中を思うと心残りはずかしく思われてたまらない思いがする。ごくろうさまでした！ 高野！

高野とはクラス・メイトであると同時に予科時代からの一橋山岳部員であったが、学部に進むと一緒に常盤敏太先生の民法・(統制)経済法のゼミナールに入れて頂きゼミの勉強も同じ途を歩むことになった。

我々が学部に進んだ昭和十七年頃になると第二次大戦における吾が国の頹勢は蔽うべくもなく、戦線へ兵員・幹部を補充する為に徴兵猶予で在学していた学生の猶予は取消され、卒業時期がはじめは三ヶ月、次は六ヶ月と繰上げとなり、繰上げ卒業と同時に学生は軍隊

に入り戦線に赴くようになっていた。このように学生生活には戦争の影が重苦しくのしかかり、平穏な学業の継続は難しくなっていたなかで、山岳部長でもあった常盤教授、高野との学生時代最後のスキー山行となった志賀高原行は忘れられない。

食料、衣料などの生活物資の供給は極度に窮迫してゐた。山の道具にしても、スキーの板はヒツコリーなどの輸入品は入手不可能で辛うじて買えるのは、今では山岳博物館で展示品となっているような単板のイタヤ製。それに何回も亜麻仁油を浸み込ませて水を撥くようにした上にワックスを焼付ける。軍用に優先される為に牛革のスキー靴は禁制品となり、代用品として使われる豚革製のスキー靴は毛孔があつて水が浸みってくるような代物。山小屋に泊めて貰うのにも闇で手に入れた米持参と云つた具合であつた。

発売枚数が制限されていて簡単には手に入らない汽車の切符をやつとの思いで手に入れ、長野から湯田中までは辿り着いてはみても、それから先の交通機関は全くない。湯田中から上林を経て、「ざんげ坂」はスキーを担いで喘ぎ喘ぎ登って丸池泊り。長池、木戸池とシールを貼ったスキーを履いて人気のない雪道を熊ノ湯まで。

翌朝のぞきの小屋までと登行を続ける足が

重くなり、もう着く頃かと思いはじめた時、何か叫びながら林間の急坂を滑り降りてくる人々がいた。ドイツ留学経験者の常盤先生があれは「バーン・フライ」といつているんだと云われる。あ、「BAHN FREI」、ドイツ語で「どけ、どけ」と云っているのだと分かった。大戦の開戦以来全く外国と隔絶してしまっていた日本でその短い外国語の響きが、何とも新鮮に聞こえた記憶が今でも残っている。

その人達が降りて行ってしまうと雪山はしんと静まり返っていた。雪景色を眺めていると、今も戦地で同年の若者達が生命を散らせているのが遙か遠くの世界のこのように思われた。高野と過ごした学生時代最後の冬山だった。

いろいろありがとう！ 高野！

訃報

藤巻 悟氏 (昭48年卒)

1999年11月23日ご逝去 (事故死)

柿原 謙一氏 (昭12年卒)

2000年1月16日ご逝去 (病死)

2月8日に秩父神社にて秩父鉄道

社葬予定

高野秀男君を偲ぶ

小林 茂雄（昭19）

昭和十四年四月。

小平の予科校舎の一年四組の教室では、一人の外人教師による初めての授業が始まらうとしていた。無機的な声で次々と名前を呼び上げて出欠をとっていたが、途中でそれが止まったと思ったら、早口で何かまくし立て始めた。青い目の先生に直接教はるのは初めての当方にとっては、何を怒っているのか、さっぱり判らぬのでキョトンとしていたら、その怒りの先に高野へと云わせてもらおうがいた。あとで判ったことだが、先生に出欠の返事をする時は「イエス、サー」と「サー」をつけよ、と云うことに対して高野が抵抗を示し、押問答の末、それが嫌なら日本語で「ハイ」と云へということになった。彼は平然とした顔で大きな声で「ハイッ！」と云ったのが、何ともユーモラスでおかしかった。聊か、尊大な構へで学生に接していたことに対するクラス全員の気持が込められている様で皆の哄笑を誘ったのだらう。お互いクラスメートの

顔もよくわからぬ中でも、中々のサムライがいるわい……と感心したものであった。

もともと彼は優秀な成績で入学して、クラス委員などをやらされていたが、語学には特に優れた才能をもっていた。その後、次第に英米文学の世界に傾注して行き、造詣を深めていた様で、よくお茶をのみながら、その一端を語り、例へば、チャールズ・ラムのエリア随筆を絶賛してその一読を薦めるような予科生でもありました。

そんな高野は同級の松下と一緒に山岳部に入部した。今もその当時も、新入部員の獲得は中々の難事だったとみえて、予科三年の山田亮三さんが休み時間に我々の教室の演壇に立って、山岳部への勧誘の熱弁をふるっていた。私の方は、と云えば、茶菓につられて、水泳部の歓迎コンパに出て、あとで食ひ逃げだど云われたり、あちこちと日和見をしているうちに予科一年は過ぎて行つた。その間、高野は初めての夏山合宿で経験した穂高、滝谷の凄さなどを眼を輝かせて語っていたが、いつも結論は、行って見ないことには判らんよ……ということであった。

昭和十五年、予科二年になった時、遂に私も山岳部に入れてもらった。以後、今日まで私が山と共にあるのは、強引に誘ってくれた高野と松下のお蔭である。当時、高野はスリ

ムな体型の見かけによらず中々の頑張りやで、その長い足で飛ばすとその速いことには皆、閉口したものであった。そして、クライマーとしての優れた素質も現はしはじめ、予科山岳部の柱として大いに期待をかけられる様になつて行つた。

昭和十六年に入るとわが山岳部も、本科は勿論のこと、予科、専門部の部員も顔ぶれが揃ひ、久方振りに登らん哉の気運に充ちて、本格的な山行計画が樹てられる様な状態になりつつあった。十月の連休を迎へて、奥又白隊、甲斐駒隊、奥秩父東沢隊、その他個人山行も含めて一斉に動き出した。

高野、佐野（専門部）を含む私達は奥又白へテントを張つた。この時は前の日に寒冷前線が日本列島を横切り、時ならぬ大雪をもたらし前穂全体が真白に覆はれていた。古い雪が氷と化した上に、五十センチ以上もサラサラの粉雪が積もっているという最悪のコンディションであった。思へば、この低気圧が奥秩父にも最悪の状態をもたらしたのだらう。我々が四峰の偵察に出かけた後に、誰もいない筈の池畔のテントから「ヤッホー」がかり、人影が、頻りに我々を招いているのが見えた。

異様を感じながらテントに戻ってみると、テントの中に「チチブタイソウナンノウレヒ

アリ、スグガヘレ」という電報が置かれてあった。後で聞く所によると、先に徳沢に下りていた日大山岳部の方が徳沢のオヤチに頼まれて、池畔の我々のテント迄届けてくれたものであった。

凍てついた松高ルンゼを駆け下り、徳沢で飯をたいてもらった後、真暗な徳本峠を越えて一気に塩山へ向った。此の時の高野は体調を崩していたと思はれるのに一言もこれを云はず、随分と無理をしたことと思う。此の遭難は、やつと盛り上りかけた山岳部全体を消沈の淵に沈めると共に、折りからの時局の動きと相俟って重苦しい空気が部の中に拡って行くように見えた。併しながら、此の年は私にとつては年間、延べ百二十日位、山に出かけていた計算になる忙しい年であった。

そして、昭和十六年十二月八日。開戦。緒戦の戦果に湧きかへる新宿駅のホームに大型キスリングをかついだ高野と清水（専門部）と私の三人が冷たい視線を背中に感じながら島々へ向ったのは年の瀬も迫った二十四日の夜であった。

上高地も徳沢も人っ子ひとり、いなかった。槍沢小屋から槍ヶ岳頂上に立ったのは昭和十七年一月元旦であった。風は強く烈しかったが残照に映える大パノラマの展望は荘厳そのもので、いま、下界で戦争が始まっていると

いう、その不思議さをしみじみと思ったものであった。天候に恵れ、順調に槍見平まで下つて来て、振り返った時の槍の穂先。高野が「ひよつとすると、これが見納めかな」と笑いながらつぶやいていた。

松本駅前の飯田屋旅館で帰京の旅装をととのへていた時、真珠湾攻撃の戦果を撮った大本営発表の大きな写真が新聞にのつていた。帝国海軍も中々やるじゃないか、などと他人事のようなことを云いながらも、来し方行く末を案じつつボヤキ合っていたものでした。その後、いつの頃かわからぬが、高野が地方へ行った時、アミーバー赤痢にやられて回復が本調子でないと語っていたことがあった。

昭和十七年。この年の新入生は、中村、石井、山崎、ほか多士済々の顔ぶれで、五月に行われた冷沢の合宿は二十数人という近來にない大部隊となった。鹿島槍から白馬へ縦走する根本さんのパーティーに加わった高野であったが、此の時も体調わるく、途中、唐松から本隊と別れて下らざるを得なかった。無理が利かなくなつたと自覚しはじめたのは、此の頃からであらうか。次第に山行から遠ざかっていったのも彼の本意ではなかったであらうに。

卒業後は、遂に一緒に登ることはなかったが、クラスの例会には飄々としてよく出かけ

て来ていた。そんなある時、彼が「此の頃は余り夜の会合には出られないので……」と洩らしたことがあった。高野本人の身体の具合によるものかと思っていたが、奥様の看病に尽くされている為のようであった。その様な話になると余り多くを語らぬのが常であった。

その後、奥様の病氣も奇跡的に快方に向ひ、高野自身も少しは楽になっていると我々は思っていた。現に今年の八月のクラス会には、全く変わらぬ元気な姿を見せていた。ところが、この時、既に一年以上も前から高野自身が進行性のガンに冒されていることを告知されていたというではないか。誰にも知らせず、二人の御子息にも告げず、奥様と本人の二人で苛酷な運命を静かに受け止めていたのである。

私達の仲間から、また一人、サムライがいなくなりました。山を愛し、野鳥を愛し、私を山に導いてくれた君の霊に、深い哀悼の意をささげ、ご冥福をお祈りします。

平成十一年十二月

「中樹会」をどう存じますか？

渋谷 一郎（昭28）

知る人ぞ知る……一見して「針葉樹会」に何らかの関係をもつ組織と感じさせる名称ではありません。

私がこの会のメンバーに加えてもらったのも、正確にはいつの時点やら、記憶も定かならぬ以前の事になってしまいました。もちろん全員が「針葉樹会」会員であることはいうまでもないのですが、取りたてて、これといった会則も会長もない、実にラフな構成の小集団で、年に数回の山行（二泊または日帰り）やスキー行（年に一回、2泊3日）にあたって、必ず事前の準備会と事後の反省会がワンセットになっていて、如水会館14階の一橋倶楽部でウィークデイの夕方に集るのを常としています。

メンバーの年齢構成は望月敏治氏から始まって旧制東京商大の最終年次まで（例外として新制初期の高橋尚好氏が入っている）、年齢的には70歳代の半ばから60〜70代の境界までを含む、むしろ「老樹」にふさわしくな

りつつある世代に属する面々です。

私も参加し始めたのがかなり古い（もう10年は越しているでしょう）とはいえ、その沿革については詳しくは知りません。ただ聞くところによると、望月、佐藤、横山、小泉、中村氏あたりが声を掛け合って始まり、前夜に横山氏の宇佐見の別荘でコンパをし翌日、巢雲山に登ったのを嚆矢とするようです。

私事にわたりますが、私は大学を卒業後、研究職をめざして長いこと定職に就けなかった孤独な時期がありました。大学の教員になつてからは当局の立場から大学紛争に延々と関わったりして、果ては近ごろの大学の社会的な変質と空洞化の中で翻弄され、いささか荒涼とした心境にありました。針葉樹会とは全く接触のないまま30年近くが経過し、定年が間近かになつて、やっと散文的な雑務から解放され、日常の時間に余裕が出てきたところへ中樹会からの誘いが掛かったというわけでした。

渡りに舟と、異業種の世界で経験を積んできた友人たちとの旧交を温めるのに、手間ヒマは掛かりませんでした。かつて大戦直後の飢餓時代に、山で寝食を共にし、一本のザイルに命を托し合つた仲間としての温かい感覚が、すぐによみがえってきました。今となつては、この仲間たちと山の憶い出を共有して

いて良かった、というのが現在の想いです。

歳月の推移とともに、わが中樹会にも確実に高齢化の波が押し寄せてきています。まだ少数とはいえ、すでに何人かのメンバーが鬼籍に入りました。また体調のために、山へ登れなくなったり、麓で仲間の下山を待つのを余儀なくされたり、それどころか如水会館での会合にも出てくるのが困難な体調をかこつているメンバーも出てきました。そこで目下、会にとつての急務は、どうやって、より若い世代の中に活力ある補充メンバーを見出してゆくかという点ですが、これもなかなか妙案も浮かばないのが現状です。

《探検史を紀行する》

旧東チベット、カンバの世界を往く

中村 保 (昭33)

——一九九九年十月

今年（一九九九年）の秋も中国南西辺境に出かけてきた。メンバーは先輩の横山皖一さん、私の広島在住の仲間・永井剛さんと私の三人。合計二〇四歳の老人パワーのコンビである。たいへん成果の多い旅であった。以下紹介する。

「ジェーン・キングドン・ウオード様

写真集『青いケシの咲くところ』の著者、千葉盈子さんのご紹介で筆をとりました。私はここ十年間、未踏の山々の姿を求めて、中国南西辺境に足を運んでいる者で、アルパイン・ジャーナル二〇〇〇年号に、ご主人の足跡をたどって旅をしたメコン・サルウィン分水嶺の雪山と深い浸食の国への紀行を掲載します。

（中略）本題に入りますが、一九五〇年二月にあなたがたご夫婦が東南チベットの察隅で一人の英国人宣教師G・N・パターソンと邂逅したことを想い出して下さい。その事はあなたの本“my Hill so Strong”に書かれています。彼が数人のカンバとともに新

中国によるチベット侵攻の苛酷な実情を外の世界にアピールするため、雪深い横断山脈を越えてインドへ決死の旅を敢行した冒険譚は“Tibetan Journey”を読んで知っていました。

さて、私は探検史を検証するために先蹤者たちが辿った四川・チベット旧街道を理塘県の喇嘛壇から巴塘まで今年の十月に歩きました。その途中、凶らずも波密で、一九四七～五〇年にこの村に滞在し医療に従事した二人の宣教師のことが語り継がれ、彼の住居が文革の難を逃れて今日まで保存されていることに感銘を受けました。村人達の話はパターソンの記述を正確に裏付けるものでした。

このことは旅の予期しなかった収穫であり出来ることならパターソンと交信をし、半世紀の空白を埋めるに値する情報を提してあげたいと思います。つきましては同氏の消息をご調査下さり、現住所をご連絡いただければ幸いです。

一九九九年十月二九日、中村保」



四川省最奥のラマ僧院（乃谷根巴）、600年の歴史をもつ秘境の名刹

「中村保様

今朝お手紙を受け取りました。信じられないと思います。二日前にパターソンの本を再読し終えたばかりのところ。ほんとう

結果として、予期していなかった英国人宣教師の事蹟を検証するという収穫を得たし、旧街道の現在の状況を確かめ、山の関連で言えば格婁北西の山々のイメージを掴み、今後の具体的取組み方への糸口ができたと思う。出発に先だって、古くは一八四四年のユツクとガベを初めとして十二人の探検家の紀行とルートを整理し、それぞれの記録をサブノートに要約して持参した。彼等の観察のうちでも先駆者T・T・クーパー（一八六八年）、ウイリアム・ギル（一八七七）、ハミルトン・バウアー（一八九二）、寺本・能海（一八九九）、F・M・ベイリー（一九一一）を主に参考とした。

旧道のうち理塘・喇嘛埡の間はすでに自動車道路ができていたので、馬で往くキャラバンは喇嘛埡・巴塘間の約一八〇キロメートル、これに乃谷根巴（ラマ寺）を往復する二〇キロメートルが加わり八日を要した。往古の街道の今昔を比較してみよう。

(1) かつて沿道のあった村落は殆どなくなり、夏だけ使われる放牧小屋になっている。二郎湾（現在の南達）、三壩（熱梯）、大所（新友込）など定住者のいる村ではなくなっている。

(2) 探検家達は立ち寄っていないが、格婁峰東側の溪谷にある乃谷根巴は六〇〇年前に

開基された立派なラマ僧院で今日でも信者がたくさん訪れている。背後の岩峰群と僧院のたたずまいは「シャングリラ」と表現したいような絵になる景観である。

(3) 一九八八年に日本ヒマラヤ協会隊が格婁峰を登ったとき理塘から南達に入ったが、そこから西側は一九二二年にペレイラ將軍以来、外国人が通った記録を私は知らない。前述の英国人宣教師は別の道から波密に入っている。

(4) 川蔵公路ができて後も旧街道は使われていないが、喇嘛埡から巴塘に行くキャラバンはない。熱梯から大所へ越える三壩山は通らない。街道より少し南の波密が中継点になっている。我々も馬を波密で交代した。これが幸いしてパターンノことが判った。

(5) かつてこの地方は盗賊の巣として悪名高く、多くの探検家はチベット兵の護衛をつけて理塘から巴塘まで旅をした。が、現在はそんな心配はない。

まとめとして日程を示しておこう。

九月三十日 成田→上海→成都

十月一→五日 成都→康定→理塘→喇嘛埡

（車）。大渡河沿いの崖崩れで一日半ロス。

〃 六日 喇嘛埡（三七〇〇m）にて馬10頭

調達手配。

〃 七日 キャラバン出発。喇嘛埡→南達→乃谷根巴（四一三〇m）。広大なヤクの放牧地に行く。

十月八日 乃谷根巴→キャンプ（格婁の南）

〃 九日 キャンプ→熱梯→峠の下のキャンプ（四二八〇m）

〃 十日 キャンプ→峠（四四二五m）→波密（三六四五m）

〃 十一日 波密→拉托拉（四四二八m）→キャンプ（四〇二〇m）

〃 十二日 キャンプ→放牧小屋（四一六五m）。終日ヤクの大群の移動とともに岩峰と針葉樹に囲まれた美しい谷を進む。

〃 十三日 小屋→扎瓦拉（大所山、四九九五m）→江巴頂のキャンプ（三七〇〇m）。キャラバン中のハイライト。天気恵まれ格婁峰西面と周辺の高峰を写真に収める。道は思ったより良好で危険な所なし。

〃 十四日 キャンプ→巴塘、キャラバン終了。

〃 十五→十七日 巴塘→成都（車）。

〃 十九→二十日 成都→上海→成田。

三人とも高山病に罹ることもなく、全行程

を元気でまっとうすることができた。

藤野町南側低山散歩

市畑 進 (昭33)

神奈川県最北端の津久井郡藤野町は戦時中に藤田嗣治、猪熊弦一郎、佐藤敬、中西利雄、などが疎開していたという縁から今は60人からの芸術家が住み「ふるさと芸術村」として知られている。芸術都市にふさわしく芸術家の創作オブジェが域内沿道に展示されている。

藤野町には、平成11年2月8日に125周年記念館建設実務委員会のメンバーとして「昭和54年、相模湖寮内に移設された向島艇庫の楼上にあったマーキョリー紋章を如水スポーツプラザに移設出来ないか」という如水会理事会のご下問の調査に行っている。

行ってみると直径約1・5mのマーキョリー紋章と紋章の周りをラテン語の「MENS SANA IN CORPORE SANO (健全なる精神は健全なる身体に宿る)」をテラコッタで浮き出させてある。碑文は蓼

沼謙一学長、昭和54年4月1日である。しかしメインテナンスが悪く、テラコッタもあちこちにひび割れが生じていて、しかも推定28トンもあつて、とても移設できるものではなかった。

記録によれば移設式には与瀬神社の神主にお願いして祝詞を読んで頂いている。ローマの神マーキョリー(ギリシャではヘルメス神)を日本の神の加護をお願いする? まあイイか。そんなことはよくある。

町の北側・東側が県立陣馬相模湖自然公園に指定され、町と東京都との境界にある生藤山(990m)、陣馬山(857m)、景信山(727m)、高尾山に連なる城山(670m)はハイカーに親しまれている。無論、小生も何度も登っている。ところが町の南側の山はあまり知られていない。

★秋の南側低山をのんびり登ってみた。

(平成10年12月6日)

相模湖の南側の道志山塊の末端にある低山、鉢岡山(450m)に登り、さらに峰山(578m)を登って町営温泉でひと風呂浴びて一杯のむという案をデザインした。藤野駅8時59分着 9時5分のバスで赤沢下車、無論相模湖をわたって車道を歩いても構わないのであるが平日はダンパーの往来が激しい。

赤沢バス停から車道を登る。20分位で車道を分かれ里山に入っていく。尾根にでて南に右折しながら登り続けると頂上につく。

頂上にはマイクローエーブの中継塔がたっている。案内板によれば武田軍の狼煙台があつたという。ここから5キロ離れた四方津の御前山(450m)、そこから大月の岩殿山(634m)に連絡され、そこから先は甲府に早駆の馬で知らされたのだろうか。左眼下に相模川に沿って甲州街道が走っている。

じーっと街道を眺めていると敵の侵入を監視する監視者の緊張が時空をこえて伝わってきた。ココは武田軍の最前線だったのだ。西真つ正面は石老山(693m)の稜線だ。多分大明神展望台のあるあたりだろう。

帰途、道は落葉で滑る。注意しながら紅葉を楽しむ。遠くに扇山(1138m)がみえる。赤沢バス停まで戻り、川上川の橋を渡ると県立藤野芸術の家に行く。県立藤野芸術の家は芸術棟・宿泊棟・野外スペースから出来ていて陶芸・木工・ガラス細工などが体験できる滞在型の芸術活動施設だ。

施設のレストラン「グルッポ」でゆっくりとコーヒーを楽しむ。かるい散策の後のコーヒーは格別だ。施設を見学する、親子が大勢クリスマスツリーをつくっている。

再びバスに乗り道志山塊の裾野をあがり大

久和バス停でおり牧野小学校の先を右折して峰山散策路にはいる。小一時間も歩いたらうか頂上につく。頂上には古峯神社という小さな木造の社がある。

古峯神社と云えば先々月、鹿沼駅から日光前山にある古峰ヶ原山（1378m）に登った時に登り口の古峯原に同名の古峯神社があった。日本武尊を祭神とする神社で講中2万人、崇敬者200万人をこえる神明造り御本殿、茅葺きの大拝殿にきれいな参籠部屋を持つ大神社であった。同名の神社でもずいぶんちがう。

視界は樹々に遮られよくないが、裏丹沢の焼山、大室山が少し見える。降りの道は国体で使われたためによくできている。ゆつたりと里山の紅葉を楽しみ、真正面の石砂山（この山裾に広がる相模湖CCを眺め——このゴルフ場は呉服橋の酒類卸商近辰商店がはじめた関係でご縁があり、昔はよく来たなと思いつながら小舟村のバス停につく。バスはない。

県道をゆつくり大久和まで歩き藤野町町営の「藤野やまなみ温泉」にたどりつく。この温泉は平成6年にできた。泉温46・1度、泉質はナトリウム・カルシウム・硫酸塩・塩化物泉で、pH9・24、成分総計4260mg/リットル、適応症は神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩などだそうだ。

入浴料3時間600円、入館時の時刻が入っている。超過すると1時間当たり100円の料金だ。広い部屋を3時間3000円で借りてゆつたりとフロに入る。浴槽は広いが真ん中の丸い5〜6人しか入れない浴槽には5〜6人がじーつと入っている。この浴槽は源泉が出ていて身体にとってもイイのだそうだが速い人は10分に出てくる、遅い人は1時間かかっている。

「ワタシはゆつくり入るのが大好きなので」と某氏夫人がいう。「あ、そうですか」としか返事のしようがない。

あがった順によりあつて飲みはじたり、食べはじめたりする。

4時のバスで藤野駅に向かう。もう暗くなってきた。

★昨年12月に鉢岡山（450m）から眺めた石老山（693m）はピクニックランド側から過去二回登っているが、藤野町サイドから登ったことはない。石砂山から石老山に登ってみたくなった。

（平成11年1月16日）

藤野駅から東野行きバスにのる。バスは峰山に登った大久和、小舟を過ぎ、さらに登り続け東海自然歩道のある道志山塊の下をとおり菅井トンネル——トンネルを抜けると道志

川の谷間に入る——このトンネルの手前の菅井小学校でおりた。

小さな小学校で入口の柱にタテに東経139度9分2秒 北緯35度33分3秒、海拔386・60メートルと書いてある。

横に小さな汚れて真っ黒になった二宮尊徳像が建っている。台座に「報徳」と彫ってある。そういえば僕らの小学校時代にもあった。「報徳」？ 今では死語か？

やってきた小学校の先生にシャッターをお願いする。この小学校は明治6年に設立、125年の歴史がある。わが一橋より2年先輩だ。最盛期は1000人の生徒、今は生徒10人で、先生の数も10人だという。

明治5年8月、小学（8年）、中学（6年）、その上の大学の段階を定め、小学校は国民すべてが就学することとした学校教育に関する法令が發布された。發布から数年間に全国で2万校以上の小学校が整備され、約40%の就学率が達成されたという。

この小学校もその一つなのだ。しかし菅井の手前の眼と鼻の先、車で5分の大久和に牧野小学校がある。生徒10人に先生10人という小学校をどう考えたらよいのだろう。

帰宅後、藤野町教育委員会に電話で訊ねるとやはり因縁のある裏話があった。昭和47年

に町に二つある中学校を統合しようとしたときに裁判ざたになった。その結果、10年統合が遅れた。そんなことがあって小学校に手を付けることはタブーだったのですという話だった。なるほどそれで藤野駅と一橋の相模湖寮の間の陣馬山系の南斜面にある町立中学校の校舎が吃驚するぐらいモダンで綺麗なのだ。事情ははつきり言わなかったが村の対立らしい。

しかし「ここ菅井の教員は『ケンタン』ですから」という。「ケンタン」と云われても分からない。きくと普通、教員の人件費は国県で半半の負担である。しかしそれも文部省の査定する定員以内であって、オーバー分は県が単独で負担しなければならぬ。それを「ケンタン（県担）」と業界用語でいうのだ。神奈川県は財政事情も悪化から「廃校、統合は避けられそうもありません。そうなたらスクールバスでしょうね」という話であった。

里山の石砂山↓石老山に至る東海自然歩道に入るところに案内板がある。「此の山の城は北条氏（小田原）の家臣尾崎掃部助がまもっていたので尾崎城山という。その子孫が尾崎尊堂である」と書いてある。同行の秀才友人が確か尾崎尊堂は三重県令だったはずだが出身地はここかとつぶやく。

ところで、尾崎城山の斜面を登っていると「菅井農業小学校」という立て札を見付けた。そんな小学校があったかなと思っていたがコレもついでに訊ねてみた。

「今西祐行」さんという児童文学者が主宰する農業教育の私設小学校だそう。電話番号をきき電話をかけるとご本人が出てこれ、以下をうかがった。

「現在生徒70名（東京からも入学している）、入学は3月、1年制、授業期間3月から11月まで。高地でこの期間位しか農業が出来ない——今日も雪が降っています。なお継続可です。現在継続が7、8割で新入生の枠は10名から20名位、12月までに先着順で募集している。授業は日曜日、夏期はエキストラあり、毎月授業日を連絡する。授業料は傷害保険料等込みで一人4000円/年、一人増すごとに1000円」とのこと。

学校の農地は道志川の峡谷をはさんで遠く丹沢大室山、真つ正面に丹沢焼山をながめられる城山の南西斜面にある。

東海自然歩道をしばらく歩くと突然身体にライフル弾を巻きつけ猟銃をもって座っている一人の狩人にあう。「エッ、猪ですか」「今ココを通った跡がある」。見ても分からない。猟犬で追い立てそこを撃つのだそう。仲間の来るのを待っているのだそう。去年は16

頭しとめたとのこと。

つい「どこに行けばご馳走になれるのですか」と質問する。「それぞれのウチでもご馳走するんが」と何か歯切れがわるい。この世間もいろいろあるのかな。愚問だったか。間違われて撃たれてもかなわんと早々に立ち去ることにした。

途中またまた伏馬田方向からライフル弾で身を固め猟銃をもった2人にあう、挨拶をしても返事がない。全神経を緊張させているからか？ それとも早く立ち去ってくれと云うことなのか？ 両方だろう。石砂山の斜面を登っていると「ダン」という銃声が聞こえてきた。

石砂山は頂上近くで左に山を巻き南に登り直す。左下は相模湖CCだ。道はあまり手入れがよくなく崩れたところもあり、こんなところで足を滑らしてもばかばかしいと慎重に歩く。頂上で昼食とっている南のヤブのなかから夫婦が登ってきた。ヤブを登るといふ登山をはじめたら面白くてやめられないという。

30分位いてすぐに篠原向けておりはじめた村にのりてからかなり歩き、指導標に従って右折、再び石老山に向けてのぼりはじめる。雲一つない快晴の石老山の頂上では景色は石砂山とかわらないが石砂山はるか下に、道

志川の谷間やその先の丹沢山塊がひときわ大きく迫ってくる。昨年、東から登った大室山（1587m）、犬越峠（1050m）、一年登った檜洞丸（1601m）、浪人のおきに登った蛭ヶ岳（1672m）と焼山（1060m）がみえる。

高校を卒業して浪人したばかりのとき、高校時代の悪友3人で学生服で弁当と水筒をぶら下げて塔ノ岳に登り、ついでだと丹沢山を経て蛭ヶ岳と歩き、またついでと焼山まで来てしまった。どこにおりたか覚えていないが最後は西日のなかを左斜面でおりたから伏馬田あたりに下りたのだろう。数人集まって夕涼みに出ていた村の若者きくと「橋本行きのバスは終わったよ、歩いていっても5、6時間位かかる、最終列車に——勿論当時は横浜線・相模線のみで、京王線も来ていなかった——間に合わないよ」という。

丹沢を縦走してきたというと呆れ返ってその内の一人が「おれんちに泊まれ」という。有り難く泊めて貰う。フロが久しぶりの五右衛門風呂だった。夕飯・朝飯をご馳走になった。相談して500円を御礼においてくる。3人の内の一人が一橋も山岳部も一緒に入った小林博君である。むちゃくちゃだったなと思わず苦笑する。

ゆっくり頂上から下りは始める。快晴の大

明神展望台からは一望のもとに生藤山、陣馬山、城山、眼下に相模湖が眺められ、離れるのがもったいないという感じであった。夕闇近くピツクニツクランド前バス停につく。これで藤野町周辺の山はほとんど登ったことになった。

初めてのネパール

有賀 盈（昭36）

この11月（平成11年）、憧れのネパール初訪問を果たした。僕にとつては処女峰アンナプルナに始まる沢山のヒマラヤ登山記の中にしか存在しなかった山々やシエルパの里を、現実に目にし、歩いたこの12日間は一生忘れ得ぬ旅となった。

一年前に亡くなった中島（寛）の供養にご遺族がエベレストビューホテルまで行かれる事になり、そこにヤロー会から中川、山本と僕の3人が参加させて頂いたのがそのきっかけである。

11月5日、一同ヘリコプターでカトマンズから一気にシャンボチエ空港に飛んだ。エベ

レストビューホテルはここから歩いて半時間ほどの所だが、今日は400メートル下のナムチエバザール泊りだ。いきなり3880メートルのエベレストビュー泊りでは、高度の影響を受けやすいからで、これは今回のツアー一切を取り仕切ってくれたヒマラヤ観光開発の宮原さんのご配慮による。

翌6日、ナムチエバザールからの急坂を2時間ほどでエベレストビューホテルに着く。このホテルの事と思うが井上靖の小説『異国の星』の中にヒマラヤの月と題して次の様な文章がある。

——シャンボチエという岡に半分作りかけていたホテルに泊めて貰いました。贅沢な一夜でした。星が美しく、月が美しく、エベレスト連山が見え、タムセルクの上に月が出ました。——

そのホテルの下になだらかに草地が広がり、その一角の大きな岩に宮原さんが予め準備してくださっていたので、早速その下に中島の遺骨を埋め、小さな碑銘を岩に埋め込んでお墓が完成した。日本から持参した食べ物も供え、酒をたっぷり岩にふりかけて一同黙禱して冥福を祈った。お墓の正面にエベレスト、ローツエ、アマダブラムが燦然と輝き、右手にはタムセルク、カンテガのしかかる様に迫っていて、中島の墓としてこれ以上ふさわ

しい場所は無かろうと思った。その夜は生憎星は見えなかったが、生前の中島から貰った「百年の孤独」という宮崎の銘酒を中川が持つてきていたので、皆で味わいながら中島を偲んだ。

ツアーの後半はポカラに移動して先ず市内のペワ湖に浮かぶ島にあるフィッシュテールロッジに一泊した。王族の所有というだけあって非常に居心地のよいホテルで、マチャプチャレ、アンナプルナ、ダウラギリの朝夕の眺めが素晴らしい。正に別天地で、これだけでも長旅をする価値は十分にある。

翌日、山本と僕の二人は皆と別れて2泊3日のトレッキングにでかけた。我々二人にガイドのシエルパ、ポーター、コックと3人もつき、我々はサブザックだけという大名旅行だ。今回のルートはアンナプルナ山群の南麓の高度2000メートル前後にあるルムレ、チャンドラコット（1泊目）、オーストリアンキャンプ（2泊目）、ダンプスといった山村を経てポカラに戻るもので、一日の歩行時間は精々3〜4時間といわばトレッキング入門編だ。

四六時中、マチャプチャレを真中にアンナプルナ南峰、三峰、四峰、二峰といった白き神々の座が日本においては想像できない高みに

聳えており、視界の利く時は遠くにマナスル、ヒマルチュリなども見える。ここから眺めるマチャプチャレは以前登ったマッターホルンと形がそっくりで、両方とも美しいが、こちらには近寄り難い神々しさがある。

午後も早いうちに目的地に着き農家の軒先を借りてテントを張るとあとは夕食までする事が無い。見晴らしの良い所に寝転がって、周りの風景を眺めながら夢うつつの内に時を過ごすのは、なんと贅沢な気分だろう。鶏や

牛の鳴き声、子供達の元気な叫び声を聞いているうちに、戦争中疎開先の信州の田舎に住んで居た時のあの懐かしい暮らしが思い出されてきた。

今回の旅で僕はネパールに魅了されてしまった様だ。トレッキングには今回のような易しいものから、5000メートルの峠越えを含む厳しいルートまで選り取り見取りだと言うし、花の季節も素晴らしいそうだ。とても一回だけではすみそうにない。

空飛ぶ虎の道 チョモラリ裏道紀行

金子晴彦（昭46）

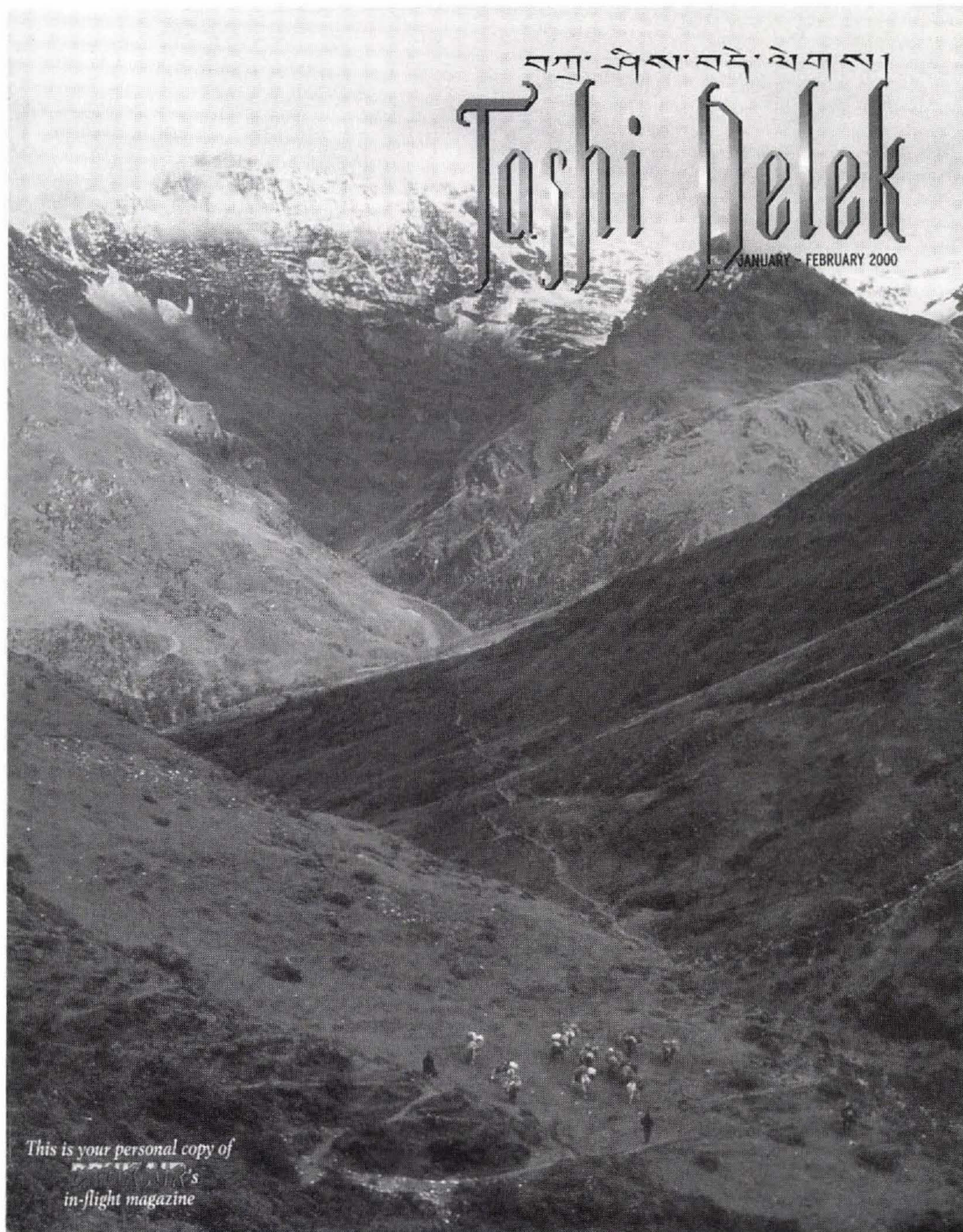
98年夏のモンズーンはいつもの年より活発で長く、中国では揚子江が氾濫し、ヒマラヤでは各所で山崩れが起こった。そのおかげと云うには語弊があるが、その秋のブータン・チヨモラリ・トレッキングはルートが大きく変わり思いがけぬほどに深い山旅が楽しめた。

香港での山登りを中心に集まったぼくらは4年の間、休暇をとってはヒマラヤを巡る山旅に出かけた。結果、遠征回数は、ネパール2回、雲南2回、チベット1回、ブータン2回の計7回にのぼった。ヒマラヤという地質

学上のこれだけ大きな事件、この現場を出来るかぎり多くの角度から眺めるといのがぼくらの希望だった。

旅に出る目的が、趣味の枠内での非日常との出会いと、それによる自分自身の拡大にあるとすればヒマラヤはまさに格好の題材だった。そして旅を繰り返すうちに、ぼくらの関心は、山は当然として、その麓の厳しい環境下で人々が生きるに当たって否応なくする宗教へと広がっていった。

チベットは高度3600メートルのその玄関口ラサからして別世界だ。山は全てを剥ぎ



取られて岩だけとなり、空はそのまま宇宙の暗黒に通ずるほどに深い。そこで人は柔らかな自分の限界をいやと言うほど知らされ宗教という調和に救いを求めざるを得ない。結果驚くほどに緻密な宇宙観を説くマンダラの世界が確立した。ところがそこにある日、共産

主義というごく即物的な宗教が参入し改宗を求めた。新しい宗教は人民を解放すると称して様々な施策をこれまで展開して来た。しかし、別世界はやはり別世界のままでこれを変えることは出来ず、しかも宗教は蹂躪され救いを求める心は行き場を失った。広大なポタ

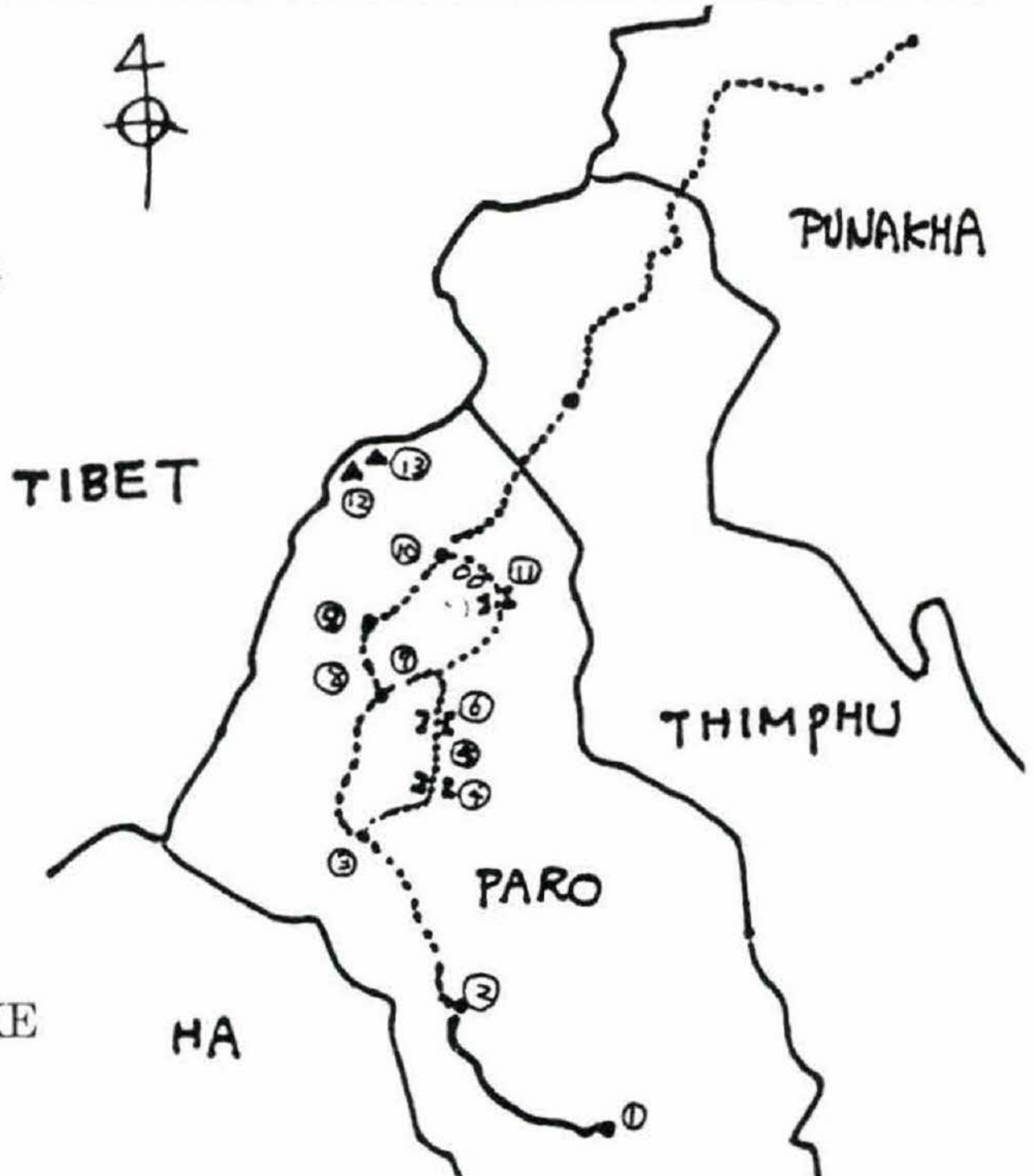
ブータン航空の機内誌に金子氏の写真と文が載った

ヒマラヤは東の端で大きく南にその方向を変える。わずか300キロメートルばかりの地峡地帯にアジアの四大河川の源流がひしめき、最奥の町徳欽に向かうには雪の峠を越え菜の花の谷を辿る壮絶な上下を無数に繰り返

ラ宮はガランとして生気を失い、無数の出窓に飾られた短い暖簾のようなタルチョばかりが高原の風に一斉に翻り、勝手に祈りを続けていた。

地図の説明

- ①PARO
- ②DRUKYEL DZONG
- ③GONITSAWA
- ④FIRST PASS
- ⑤THOMBU
- ⑥SECOND PASS (TAKLUNGLA)
- ⑦DOMZA CHHU
- ⑧THANGTHANGKA
- ⑨TEKETHAN
- ⑩JANGOTHANG
- ⑪BONDE LA
- ⑫JUMOLHARI (7314m)
- ⑬JICHU DRAKE (6794m)



さなくてはならない。人々は昔から深い谷に集まり、谷沿いの通商に依存している。秘境と違って出かけてみればそこでは深夜までカラオケの大音響が響き、ジェイムズ・ヒルトンのロスト・ホライズンの舞台はここであり、こここそシャングリラなりと言った村を挙げたの詐欺まがいの熱狂が横行していた。

ネパールではぼくらは2日の待機の後に鳥になり一挙にジヨムソンに飛びヒマラヤの北に見参した。そこからムクチナートにかけてヒマラヤの瓦礫とも言える地形が複雑に重なり合った地形はそれまでのどこよりも厳しく、人と折り合える場所というものは無いと見えた。ところが、ジャルコットでは女達が冷たい氷河からの水で祭りの後の炊事道具を総出で洗っていた。大きな銅製の鍋をきらきらと日に輝くまで磨きぬく。その労働を4500メートルの薄い空気にもかかわらずいかにも楽しげにやっている。自然とは折り合えないだけに、宗教との折り合いがここでは出来ているのかと思えた。

そしてブータンだ。この7回を殆ど共に出かけているMにどこが一番楽しかったかと聞くと即座に「ブータンだよ」と答えた。ぼくもそう思う。しかし、それはどうしてなのだ

ろう。

10月2日

佐藤久尚さんを含むぼくら6人は途中カルクッタで3時間ほどの天気待ちのあげく、2時にパロに降り立った。天候待ちを強いた激しい雨は上がったばかりでパロの谷を囲む山々にはまだ雲がまとわりつき、空気はしつとりと湿っていた。

ブータンでは外国人へのビザ発行は年間5000人程度に限定している。しかも、入国者は毎日US\$220定期払いとガイドの同行が義務付けられている。おかげで外国人訪問者には妙な輩が入り込む余地は少なく、この国と訪問者の間には最初から会員制クラブの様な深い信頼関係が存在している。そう、パロのターミナルはブータンクラブの受付と言ってもよいだろう。

ターミナルの出口でBTCLのガイド、ドルジに出会う。別に事前に顔を知っているわけではない。日本人だと見て向こうから声をかけて来る。途端に旧知の間のように荷物をわたし車に向う。これがカトマンズあたりだと、なかなかいいサービスだなどと下手に気を許して荷物を渡すと予約していた旅行会社とは全然別で、荷物料金を取られたりして、

旅の冒頭から白けることになる。

パロの西側の高台の上にあるオラタンホテルに荷物を置くと町の見物に出かけた。100メートルばかりの直線道路の両脇に、中央に入口、その両側に蒲鉾型の木彫りの装飾で飾られた窓を持つ伝統様式と同じ様な店が50軒ばかり並んでいる。

あたりに人々は少なく、犬と子供が多い。いつもの様に子供のそばに座り込む。嬉しいことに小学校で英語の授業を受けている(就学率は実に70%)。彼らは真つ当な英語を話す。ぼくが写真を撮ろうとすると「どうして写真を撮るんだ、ぼくらは珍しいのか?」と聞いて来る。確かにジーパンをはいたり、Tシャツを着たり実にこざっぱりした様子でもGDP一人当たりUS\$425(1994年)の子供とは見えない。「いやそう言うわけではないんだが、ブータンの子供というのはなかなか見られないからね」。「じゃあ、ぼくらにも送ってよ」。差し出す手帳に英語で住所を書いてくれる。王様の教育方針のおかげで嬉しいことにぼくらは十分子供達と話しあえる。

10月3日

翌日9時、ドツゲ・ゾンからガイド等7名、

馬等10頭、我々6名の隊が出発した。炊事用の大型プロパンガスまで用意した大部隊である。ほかにもアメリカ、フランス隊があり、このシーズンの山は満員らしい。

パロチエはゴーゴーと逆巻いて流れ、その横を行く道の路肩は流れに侵食されて時折大きく水の中に崩れ込んでいる。兩岸の水田は黄色く穂孕み、秋の晴天で稲穂が乾けばもう刈り入れの時期だが、まだ雨がばらつく。水田の只中には堂々たる切妻様式の農家が点在する。一見、日本の民家を思わせるが、分厚い壁と、太い柱、そしてカラフルな壁の装飾を見ればむしろ寺院建築の様な揺るぎなさにあふれている。この地の2階の居間の窓飾りは3段（普通は2段）、豊かさの象徴であるらしい。

運動会の万国旗のようなルンタ（タルチヨ）が絡みついた吊り橋を渡ると谷も道も狭くなる。2時間ほど歩いて山間の小広く開けた原っぱでドルジが運んで来たランチボックスで昼食。食後原っぱの外れに小高く盛り上がった丘に寄り道する。その丘の上にはゼントンチヨルテンがあり、回りに無数のダルシンが林立して風に翻っている。

荒削りの細長い丸太の先には木製のナイフがつけられ天を指し、その丸太に木釘でしっかりと止められたダルはまるで武田の幟の様

に威勢がいい。どのダルシンも真新しく、その下で、若い僧が骨灰でつくった高さ3センチほどの三角形の泥細工（ツァツァー小仏塔）をあたりに奉納する準備をしている。誰かが亡くなったばかりで、火葬した灰をこうしてあたりに散骨するのだ。墓は造らない。代わりに新しいダルシンが立つ。

50本近くもあるダルシンの林の中に立つてみると、はたはたと風に翻る音が重く騒がしく、まるで失われた人々の会話の様に聞こえる。無言の山合いで人はこうして永遠の語りを続けている。

3時過ぎにシャナのチェックポストに着いた。チベットとの国境に近く相当数の軍隊が駐屯しているらしくチェックも厳密だ。あたりには深く冷え冷えとした山の気が横溢している。

その先でドルジが方向を失い、遠くで牛を追っている村人に何やら尋ねた。おや彼は道を知らないのか？ 皆で顔を見合わせる。あとで聞けば彼は本来は日本人相手の仏教施設関連専門のガイドで、今回は手が足りなくて駆り出されたそうだ。日本語は造園術の勉強で2年間栃木に行った時に習ったといい、ぼくらの前ではほとんど話さなかったのだが大変流暢だ。ともあれ、秘境ブータンの山は今

やガイドが足りないほどに賑わっているのだ。観光需給は危うく崩れかかっているのかも知れない。

テント場はそのすぐ先の川沿いの河岸段丘の上で、昼飯の間にぼくらを抜いて行った荷駄隊が既に草の間の空き地にテントを張ってぼくらを待っていた。以後毎日こうした段取りが繰り返され、ぼくらはひたすら我が身を運ぶことに専念すればいい。先行していたアメリカ、フランス隊も近くに幕営している。山は一気に深まりいよいよトレッキングスタート地点だ。

大きなメステントで夕食をとった後、今回のスケジュールの説明を受けた。大雨で途中の橋が流され谷沿いのノーマル・ルートは通れない。代わりに谷と平行して北へとのびる山の尾根伝いに行かざるを得ない。その場合でも途中で川はあり、そこにかかる橋も流れていて水量次第で渡れるかどうかは行ってみなければ分からない。渡れないとなると実に5000メートル近い峠を越えなければならぬ。これをドルジではなく、小太り、丸顔の中年男のウォンディが説明した。彼はもう20年以上山のガイドをしており、今ではトレッキングのオーガナイズ全般を仕切っているとのことだ。

それにしてもあたりの事を知らないのだからどの程度の話なのか皆目分からない。こんなことは昨夜説明すべきだったろうがドルジでは無理だった。白銀の山々を見はるかしながらの峠越えになるのかという期待と、6名全員が歩き通せるのだろうかという不安が交錯する。

10月4日

夜半大雨が降ったが朝にはわずかに雲が切れ青空がのぞき、ほんの瞬間純白の尖峰が姿を見せた。「あの横を行くんだ」。ウォンディがどうだすごいだろうという具合に顎をしやくって見せた。

7時半、テント場の裏から始まる急登に取り付く。こうした道は通常外国人は通れないのだが今回は特別。ウォンディが先頭、ドルジがラストで隊列を組む。前に来たことがあるのかと聞くとウォンディは16年前に来たと胸を張った。その間何も変わっていないだろうか。

雨に濡れ閉ざされていた森は久しぶりの朝日を浴びてきらきらと輝いている。村を見下ろす最後の場所になる切り払われた一画には五色のダルシンが無言の地での朝の挨拶の様に翻っていた。白は空、青は水、赤は火、緑は地、そして黄は風を表すという。

登り続ければ森はいよいよ深まり、しつとりと濡れたサルオガセが木漏れ日を浴びて、黄金のネックレスの様に輝いている。登りはいやと言うほどに続き、遠い学生時代にヒンズークシの山の中を闊歩した経験があるもの今ではすっかり山から遠去かっていた佐藤さんが次第に遅れ始める。谷沿いの道であればこんな事にはならないのだろうか裏街道の旅は容赦無い。

昼食後1時、ようやく稜線に出る。ずんぐりと大きな山体の上の稜線で、まるで牛の背中のようだ。高度約4000メートル、佐藤さんはそこで正に牛歩になり、数歩歩いては膝に手をやり立ち止まる。「まあ普通のトレッキングですよ」そう言って誘った者としては何とも弁明の法が無いが歩いてもらうしかない。

視界は悪いが、足下にまるで這松のようにびっしりと群生するエトメト^{シメツナゲ}石楠花が見事だ。春には全山赤や黄や白の花でおおわれるという。

霧の中から、真ん中におばあさんをはさんだ3人組が現れた。真つ黒なヤク犬も2頭。右端の男は手にポットなんか持ち、ゆっくり歩いている。事情を聞くとおばあさんが病気でパロの病院まで歩いて治療に行くのだとい

う。健康なほくらが歩いてさえ息絶え絶えの道を病人が行く。もう帰って来れない道かもしれない。

尾根道は霧の中をゆつくりと登り、シヤクナゲも無い岩だらけになると高山植物が見事だ。今日の最高点には古いダルシンが力無く揺れ、巨大なカールの上縁の一画になっている。見下ろせば霧の合間に広々とした草原が広がり、対岸にはその草原の中に一本の道が続いている。中央を蛇行して下る川の脇に先行了したフランス隊の青いテントが見える。おそらくこの谷はほくらが本来登ってくる道の^{上流部分}で、これをさらに登って行けばチョモラリベースに辿り着くのであろう。わけの分からない素人はそう思いこんで勝手にほつとした。

下りは霧が濃くドルジは程なく道を失った。たよりのウォンディは幕営のために先行していた。腰をかがめるようにしてさがし、石積みみのヤク小屋の横で幕営している先行組に合流、トンブー4020メートルに3時半着。初日から8時間の厳しい行程だった。

その夜、再び今後の行程を確認した。この谷を登って行けばチョモラリベースという勝手な思い込みは全くの間違いだった。本来の

道に合流するには更にもう一つ第2の峠を越え沢に下り、それが渡れば西に向かつて本来の道に合流、渡れなければ東へ向かい、第3の峠5000メートルのボンデラ峠を越えなければならぬ。やれやれやはりえらいことだ。今日の佐藤さんとKの様子からすればそれは無理だ。となると明日峠の向こうの川が渡れなければ同じ道に戻るしか無い。無論



チヨモラリなんかおがめない。昨夜の心配は解消されないどころか倍増された。加えて高度障害もあり皆の食欲はめっきり落ちた。

10月5日

三日目の朝はからりと晴れわたった。明るい太陽の下であらためて眺めれば豊富な緑と水に恵まれたこの広い谷は正にヤクの天国。斜面は西側へゆったりと下り、雪が斑についた岩山で消えている。おそらくその麓を蛇行して岩山の向こうから激流となってパロチエに下っているのだ。他方、ぼくらはヤク小屋のすぐ後ろに聳えている岬々たる岩峰を越えて行かなければならない。

ザレ気味の斜面の途中に岬のように突き出た台地がある。そこに一本黄色いダルシンが翻っている。鳥葬の場所かと思われるような殺風景な場所だが鮮やかな黄色の旗があるだけに一帯が人間味を帯びて来る。ひたすら登り1時間ほどで第2の峠タクルンラに出る。いつの間にかガスが出て視界が悪くなっていったが峠に立つと反対側の深い谷とその向こうに聳える万年雪をいただいた山々が日に照らされて輝いているのが見える。チヨモラリはその圧倒的な山の屏風の向こうだ。

出かける前には単なるトレッキングではなく登山らしい歩行を期待していた。それが全

く予想もしていなかった理由でいざ実現してみると、今度はいささか過激に過ぎた。峠の冷たい風に吹かれながら皆一様に目の前に広がる雄大な景色に釘付けになってしまった。

下って行く斜面の左手にはぼつぼつと緑の灌木が茂り、右手は一かけらの緑も無い巨大な岩だらけの斜面になっている。あとから来た荷駄隊がぼくらを追い抜いて谷へと下って行く。下の川を渡れるかどうかは分からない。ひよつとすると5000メートルの峠越えの決断を迫られるかも知れない。しかし、兎に角行ってみるしかない。行ってみよう。

昨日までに稼いだ高度をどんどん下る。下から土地の人が二人登って来る。ウォンデイが立ち止まって話をしている。ややして、両手を挙げてこちらを振り仰ぐ。「何だ？」皆、緊張する。「川が渡れるぞー」大声が上がる。「やったー」ぼくらも叫ぶ。土地の二人は馬を連れて川を渡ってやって来たところなのだ。これで正面奥に高々と聳えるボンデラ峠越えをしなくてよくなった。

ほつとして、たまたま現れたヤク小屋の前で大休止。高度4000メートルのヤクサだ。佐藤さんがむくんだ顔をほころばせて「助かったー」と悲鳴に近い声を上げる。もうほとんど限界だった筈だ。

西へ下る谷ドムザチヨは深く豊かな照葉樹林の森の底を縫うように走り、瀬音はすれども姿はなかなか見えない。その川が不意と目の前に現れるとそこが正に渡渉地点だった。12時になった。向こうとこつちに橋の台だけが残り、橋そのものは影も形も無い。流れは急だが最早それほど深いわけではない。ほどなく対岸に荷物をおろした馬がやって来てこちらに楽々と渡って来る。荷物用の乗りにくい鞍を乗せた馬の背にまたがるが、初めての



トレッキングのメンバー、左端が佐藤氏

こととて皆大騒ぎする。人を乗せた馬はやや緊張するのか先頭のKの馬がよろける。途端にKの右足は水の中にどっぷりとつかる。皆から大声が上がるが、何とか態勢を立て直して渡りきる。対岸でKを降ろした馬はぶるぶると体を揺すり、水が逆光の中で見事な銀色のしぶきとなって跳ね散る。

帰りにまたここを渡り、下って来た道を登り返さなくてはならないという懸念はまだ在るものの憧れのチヨモラリベースまで行けることははつきりした。あたりにはまばゆいほどの秋の光があふれている。光は一体どこから生れるのか。空、大気、川、草、葉、ぼくから自身、もうありとあらゆるものに光はぶつかり、跳ね返り、さんざめく。そのあまり光を受ける正体そのものが消えてしまったのではないかと不安になるほどだ。耳を澄ませば、瀬音に加えて、枯れ葉が風に揺れて擦れ合う音が騒がしい。ぼくらは今や秋の光に染まり、光そのものになって秋草の中を下って行く。2時20分、谷はとうとうパロチエに合流した。三叉路の空き地には古く大きなチヨルテシが立ち、そばに黄色いダルシンが一本だけ風を受けてはためている。この分岐点で旗は経を読むと同時に旅人に語りかける。おかげで人は深い山に行く孤独を慰められ、歩き

続ける勇氣をもらう。本流パロチエはさすがに大きく、まるで無数の銀糸のスタレを流しているかの様に輝いている。

橋を渡ると本来ぼくらが辿るべきだった谷沿いの街道になる。荷駄隊が通るためなのか道幅は広く、これまでの山道とは断然違って、ほぼ舗装道路と言ってさえよい。歩くのも途端に楽になる。不安な気持ちで裏街道を歩き、ようやく表街道に出てほっとしたと同時に裏街道の不安を懐かしく思い出す。ぼくらは幸にして思い出すことの出来る道のりを辿ってここまで来た。

3時、3480メートル、パロチエ沿いの森の中の幕营地、タンタカに到着した。荷駄隊の泊る小屋もある街道の要衝の地だ。本来のスケジュールからは丸一日遅れたことになる。

それぞれに落ちついて遅いハイテイーを楽しんでいると小屋の方からウオンデイがやって来て「レディズアンドジェントルマン」と大声を上げた。またまたどうしたんだと周りを囲むと、本流の橋が修復されて帰路は本流を下れることになったとの説明がされた。途端に谷の瀬音を圧するような歓声が沸き上がった。思いがけない挑戦を受けて、どうかそれに耐えて来たが、こうして今ようやく

道が開けた。そうなるこの3日間は、難行であると同時に実に素晴らしい寄り道であったことになる。金色のサルオガセ、霧の山稜、ヤクボーイ、照葉樹林の秋、牛が反芻するよ、うにこの不安な3日間を改めて味わってみる。早速とっておきのウイスキーが開けられ、久しぶりに解放感あふれる気分での夕食となった。

10月6日

「すごい」。翌朝早くテントの外で大声が上がる。両側に山の迫った深い谷の奥に朝日を浴びて輝く白無垢のチヨモラリ7314メートルの山頂部分が姿を見せたのだ。雲は右から左へ忙しく流れるが、途切れるたびに特徴のあるマツシブな三角形が輝く。谷底から見上げる山、丘から見晴るかす山、それぞれだが、金色に枯れたしかもしつとりとした谷から、これだの白さの山を見上げる喜びは思いがけない。

7時50分出発。パロチエの瀬音が異常に高く、時に話し声もかき消える。最早昨日までのような上下はなく、いたって穏やかな登りが続く。森もほどなく姿を消し、谷沿いに糸杉の疎林が散らばる。ぼくらは3日をかけて山の変化を見て来た。そして今歩いてゆく先にもっと大きな変化がありそうな予感がふく

らみ始めた。

程なくこの谷の最前線の幕営、ツイアーミーキャンプが現れる。石造りの長屋風宿舎の中からひげ面の男性が5、6人顔を出す。格段仕事があるわけではなく休んでいる間中まわりでうろろし、果ては一緒に記念写真を撮ったりした。一昔前こそチベット問題で一带は緊張していたのだろうが今では静かなものだ。

いよいよ樹木は少なくなり、石の川原が広がり始める。そろそろ雪が来るとかで高地から降りて来た白い鳥が群れをなしてあたりを飛びかい、頭上を舞うと鋭い羽音が叩き付けるように降ってくる。

正面にはチヨモラリの東側の極端に尖った山、ジチュドラギ？6794メートルが見える。ウォンディはこの山が一番好きだと言う。イギリス人が登頂したがその後、麓の村で不作、伝染病発生が続く、登山によって山が汚されたためだとして住民が請願、以後万年雪のある山への登山は全面的に禁止されることになった。神聖なままに残すことになった。きつかけの山として彼はこの山が好きなのだ。ぼくらは4日目にして巨人たちが静かに佇む聖域に足を踏み入れることになった。

その先は河原が広がり、細い流れが蛇行し

ながら気ままに走り、灌木が点在するだけのいよいよ源流近い景色となった。それでもネパールのカリガンダキなどとは全く違う潤いを感じる。おそらく河原や山肌に点在する灌木と、既に枯れて茶色になってはいるが、大きな葉の水芭蕉の群落の存在のせいだろう。それだけ他とは違ってこの地は温暖で湿潤なのだ。

1時20分、チヨモラリベース3880メートルに到着。ここにも石造りのヤク小屋があり先には壊れかけたゾン、砦がある。チベットとの戦いはこんな山奥でもなされたのだ。そして、その奥がチヨモラリ東面の大グレッシャーへと続く谷だ。雲が多く山の全貌は見えない。しかし、グレッシャーの豊かさ、厳しさは否定しようも無い。下ってくる風の冷たさと強さがそれを思わせる。反対側を振り向けば台形のチヨルテンの上に例によって黄色いダルシンが一本翻っている。一本だけの時はどういうわけか黄色だ。黄色は風を意味するというのが、この色こそは辺境の地で人の心を励ますには何よりふさわしいのだろう。ぼくもそう思う。

ようやくたどり着いたベースでどうするか。ぼーっとするには午後はまだ早い。早速、あ

たりを散策することにした。高度障害で参った壮年組と、まあいますこし元気な男女混合組が分かれて、前者はグレッシャーへ、後者はひよつとしたら越えざるをえなかったかも知れないボンデラ峠へと向かった。そこまで行けばチョモラリと並ぶ山々に見参できる可能性があった。それにしても、ようようの思いをしてここまで来ながら直ちに、越えなくて助かったと思つた峠に反対側から行つてみたいとはよくよく物好きだ。

広い河原を登ると立派な農家が忽然と現れる。2階の居間の窓から子供たちがこちらをうかがっている。その家の脇に板橋がある。渡ると対岸の斜面を登る道と、谷沿いに奥へと登つてゆく道が分かれる。奥への道は延々25日にわたつて続くスノーマントレッキングの道だ。抜きつ抜かれつしてここまで来たフランス隊とアメリカ隊はこれを奥に向かう。ぼくらは斜面を登る。

ほぼ4000メートルの高さでの急な登りはなかなか厳しい。ぼくらの重い足取りを見てウオンディは頻繁に休みをとつてくれる。高度が上がるとベースキャンプとその周りの河原の様子が見はるかせる。ヒマラヤをめぐる山と谷はどこも乾ききつていた。しかし、モンズーンが明けたばかりというせいもあるのか、このパロチエの源流の秋の紅葉の景色

は潤いに満ちている。照葉樹はひたすら銀色に輝き、ななかまどは真っ赤に紅葉する。枯れ尽きた灌木は冬への強い意志を見せる。その上に万年雪のチョモラリの大きな山容が広がる。ぼくは日本の涸沢の秋を思い出した。

さすがに登るにつれ植生は姿を変え、急坂を登り切り台地にさしかかったところで灌木はすっかり姿を消し、小さなしかし驚くほどに紫の濃いりんどうが岩陰に可憐な花を見せるようになった。エーデルワイスもふんだんだ。そこから先は二つのモレーン湖を擁する巨大なカールで、遙か彼方に峠に向けて登っている斑に雪の残る山肌が見える。5000メートルのボンデラ峠は深い雪の中ということだ。

日差しはあつても吹く風は冷たい。モレーン湖は深く青い水を湛えているがもう美しいなどというよりは、一種の鉱物の気配だ。対岸の斜面を滝が落ちている。これも雪解けの水が谷の割れ間をぬって落ちていくというだけのことだ。ものは全て原子の単位まで剥ぎ取られてしまった。

歩いて行く側の岩だらけの山の斜面が迫つて来ると、ウオンディが突然小さな声で「ブルーシープがいる」と指差した。斜面の中ほどに岩に似た灰色であるもののいささか濃い色の点が無数にある。よくよく見ればそれが

ブルーシープの100頭ばかりの群れだった。尻の部分は白くて目立つ。わずかな草を食べているのか群れ全体がゆつくりと斜面を登つて行く。慌てて後を追い望遠レンズで狙うがそれでも遠すぎる。この羊は特別保護され王以外による狩猟は禁止されており、次第に数が増えつつあるという。全てが剥ぎ取られたわけではない、この山奥には熱い体温を持つた動物がこれだけいるのだ。

2つのモレーン湖を越えると再び登りになる。さほどの坂ではないのに一歩一歩がひどく辛い。頭がずきずき痛み、肺が無駄に息をして過熱する。Mは「おいて先に行つてよ」と途中で座り込む。

4時10分、ボンデラ峠の方向の雪の山肌を間近に望む地点、4290メートルでぼくらはとうとう息が切れ、もうこれまでと、金色の枯草の上に大の字なりに寝転んだ。見上げる空は深々と蒼く、駆け抜ける風は勝手気ままだ。ボンデラ峠はまだまだ先だったが、「ここまで来ればもう十分、ボンデラを越えて来ていたら本当にえらいことだったね」遅れて来たMがそうつぶやいた。いつもの強気のMにしては大変珍しい。そこが今回の旅のゴール地点だった。

太陽は傾き、カールの底は暗い影の中に沈み、それをフレイムにチヨモラリ隣接の山々が夕日を浴びて輝いた。

冷たい風に追い立てられ帰路についた。ほぼ日が暮れたところにテントに戻る。夕食は出ているが疲れ切った体では食欲は全く無い。酒を飲む気にもなれない。ウォンデイを囲ん



ベースキャンプからのチヨモラリ

で寝転びながらベースキャンプ夜話となった。

どうしてこんな厳しいコースを来れると思っただ。危険じゃないか。

皆さんのスタイルを見ればすぐに歩けるかどうかわかるよ。そして実際に歩いたじゃない。

ここはベースと言ったって、登れないんだから単なるキャンプ地だろう。

そう、だけど気持ちとしてはやはりここがベースだからいいんだよ。

万年雪の山は登山禁止といいながら結構登山隊が入っているではないか。

いやあ、まあヘビートレッキングの延長という話もあるよ。日本人で1000人ぐらいの登山希望者を集めて機会をうかがっている人がいるけど、どうなるかな。

山にはどんな神様がいるんだい。

長寿の神様だ。登ると怒って疫病がはやる。どうやって神様にお祈りするんだい。

峠を越えたり、川を渡ったりする時に歩きながらお経を読んでいる。

オンアーフン バザグル ベメシテフン
フウン ウゲ ユギ ノチエンゲ ジョ
ンタム エマ エサラ——お経は延々と続く。
神様といってもいろいろあるが誰を信仰するの。

まずはグル・リンボチエだ。8世紀、インドのリワルサ湖の蓮の花から生まれた生き仏でチベットにわたり仏教を広め、次いで空飛ぶメス虎に乗ってバロのタクツァン寺へ飛んで来た。そこで彼は憤怒尊ドルジ・ドロに変身、バロの悪魔を幸福者に変えるべく調伏を繰り返した。

その後チベットでは多数の仏教宗派の権力闘争がおこり1616年、ドウルツク派のシャブドゥンはブータンに亡命、各地にゾンを建てブータンを一つの国家として治めることに成功した。ところが周囲のねたみを買ってインドに逃げ出した。その後、後継者に恵まれずダライ・ラマのように転生仏を受け継ぐことになり現在に至っている。その生き仏を信仰している。

ということは今でもどこかにいるのか。インドのマナリにいる。だから今度の旧正月にはヤクの襟巻きを持って会いに行つて来ることにしている。

その生き仏は何でブータンに戻らないんだい。今でも嫌われているのか。

いや皆好きだ。国王も尊敬している。でも彼はもう300歳になるけれど当時のことを忘れていない。

だってもう何代目かなんだらう。何代目でも同じ人間だ。

そんな話になってぼくらはぎよつとした。

この国の人は形ばかりでなく本当に輪廻転生を信じている。人は死後49日以内に次ぎの生命体に転生してしまう。蟻にでも馬にでも魚にでもなる可能性がある。であれば人間がそれ以外の自然すべてに対し深い親近感を持ち、和合しようとするのは当然だろう。そして、転生を続けるジャブドゥンは300年たった今でも当時の迫害を自分のこととして覚えていてブータンに帰って来ない。信者はわざわざインドの北の山国まで出かけて行って会うとする。ぼくらと流暢な英語で話すガイドのウォンディはそうすることを心から嬉しがっている。

外気はすっかり冷えきった。ぼくは2年前に出かけた同じブータンのプナカの北西の山の村チョルテンニンポの夜を思い出した。村は山の斜面に展開し、尾根のように張り出した空き地には古いゾンと、チョルテンを覆う巨大な老木があった。老木の根本のうろには小屋がけがされ、すっかり暗くなると村の若夫婦と子供がそこに来て火を焚いた。そうして一晩グミシンの木の下でチョルテンを守って寝ずの番をするのだ。もう700年以上も前に建てられたチョルテンの中にはとても大切なものが入っている。それを盗みに来る悪

霊から守るために一晩中火を焚いて過ごす。小学校に行っていて英語のわかる娘がそう教えてくれた。この国ではそういうことが平気で起こっている。

テントの扉を開けるとぱつと明るい。薄い雲の向こうに満月が昇った。ウォンディの話が意外であればぼくらのいる場所も意外な場所だった。鋭い寒気が流れ込んだ。

10月7日

翌日ぼくらは丸一日ベースキャンプの周辺で遊び、チョモラリとそれに隣接する3つの山の全貌を眺めようとした。早曉わずかにジチュドラギの姿をとらえたが、日中は続々と沸いて流れる雲のためになかなかつた。

10月8日

その次ぎの日、パロチエ浴いの道をパロへと下った。途中、テツケタン近くの火葬場で、来る時には積まれていなかった薪が山のように積み重ねられているのを見た。問題の橋は1ヶ月と言われているのが2週間で直されたのと、とで、下を流れるとてつもない急流を見ながら有り難く渡らせてもらった。それにしても下りの道の単調さはいささか拍子抜けだった。深い森の中の谷浴いの坦々たる街道であり、峠越えのドラマは一切無かった。橋が流れ、

そして直されるという滅多にない仕掛けのおかげでぼくらの旅はかくもドラマティックになったのだと知った。

10月9日

2日かけてパロのオランタンホテルにチェックインすると東京から電話があり、中島さんが10月6日に亡くなったとの知らせが入った。当日ぼくらはまだ薪の積み重ねた火葬場の横を通って登って行った。そして、2日後の帰り際、そこにすっかり薪が積み重ねられているを見た。中島さんはブータンまでは足は伸ばしていなかった。しかし、ぼくらがそこを歩いていることを知っていて、最後の知らせを空飛ぶ虎に乗ってこの山奥までも伝えに来たのではないか。オランタンホテルの暗い松林の中で、そういうことが起こってもよいと思った。であれば中島さんは山の上のブルーシープに転生してあの岩肌を自在に駆け抜けているのかもしれない。

そうした思いが不思議には思えなくなるよいうな道をぼくらは98年の秋に歩いた。

懐旧の奥多摩

西牟田伸一（昭47）

11月21、22日、川乗山から西谷山・小川谷を一周した。このルートは65年2月に高校2年生の私が単独でさまよったルートの再現になっってしまった。

朝暗い内に家を出て川井駅に降り立ったのは8時15分。ここから大丹波川林道を詰めて獅子口小屋跡經由川乗山、西谷山、長沢背稜、雲取山、鴨沢という計画である。かなりのルートなのでテントをやめ、途中2カ所ある避難小屋に泊まる予定だった。

獅子口小屋は35年前、早稲田の学生達と同宿になり、そのうちの一人はたまたま私の近所に下宿されていた安間繁樹氏で現在イリオモテヤマネコの専門家としてテレビでときどきお目にかかる。

25年前も、当時生まれたばかりの長男を背負って雪の中で女房と共に泊まった経験がある。ひと目小屋跡を見たかったのだが林道開発が進んだおかげで道が荒廃しており、当日地図を忘れた事もあり、小屋跡を通る事なく

川乗山に着いてしまった。ここから一杯水避難小屋につく迄はかなりの高速で飛ばしたのだが、3時半までかかった。ここから2時間の西谷山避難小屋まで行っていれば計画の達成は可能だったのであろうが、それから1時間もたたぬうちに日没となってしまう事もあり、計画を縮小する事にした。結局35年前と同じルートである。

小川谷の落ち葉がゴツソリと積もった溪谷道を下りながら考えた。幼かった私はどうしてこんなルートを考え、何を思って雪深い時期を選んだのだろう。真つ暗な道をひたすら下った記憶はあるが、当時氷川駅までのバスはどこからあったのだろうか。そんな過去の自分がたまらなく愛おしく思われた。思えば先日行った丹沢も35年前、福岡県から転校してきた私が初めて登った東京近郊の山であったし、今後の私の山登りは昔を懐かしむ山に傾斜していくのかも知れない。

会員からのお便り

会員各位から会報担当幹事宛に頂いたお便りの中から近況や山に関する部分を独断で抜粋してご紹介します。（敬称略）

石井 左右平（昭23卒）

月に一回位ずつ山に行っています。此の頃どうも針葉樹会のご心配になることがあります。

横山 皖一（昭27卒）

旧年は3月に日本語教師の仕事を終え、2年9ヶ月ぶりにミャンマーから戻り、体力検定として7月北アルプス・針の木岳へ。

10月には川蔵公路（成都・ラッサ）の旧道（理塘〜巴塘）を馬に乗って平均高度4000mを8日間、友人3人で204歳の旅を楽しんできました。

中村 正司（昭28卒）

年末の「都展」で受賞、評議員にしてくださいました。

春日井 実（昭32卒）

昨年1月にはニュージラントでクック山他

のトレッキング、3月は志賀高原でスキー、5月しまなみ海道（尾道〜今治）の八つの島と海の上を歩いて渡り、6月スイス・アルプスで10日間のトレッキング、10月かねて念願のシルク・ロードの起点西安で兵馬俑・秦始皇帝陵・楊貴妃の墓へサイクリングし、また方門寺他五つの寺を巡り亡き妻の冥福を祈って参りました。シルク・ロードの旅は今年も挑戦してゆくつもりです。

鈴木 克夫（昭31卒）

12月友人のパジェロで雪の八甲田を眺めて来ました。

瀬田 宏（昭31卒）

山は登れるところを登りたい——そんな気持ちです。

山本 健一郎（昭32卒）

昨年4月から年金生活者となり、サンデー毎日を楽しみ、山登りとテニスに精を出しています。昨秋、大無間山に登りました。水4リットルとテントで20kgの荷にしごかれました。

蛭川 隆夫（昭39卒）

相変わらず、有給休暇というものがない仕

事をやりくりして、百名山を含めた大小の山登りを楽しんでいきます。昨年は、懐かしの奥穂高岳に登ってきました。

小林 修（昭56卒）

ポルトガル在の合弁企業に出向中にて、既に4年近く経過しました。こちらにいらっしやる計画は御座いませんか？ポルトガル領アソールレス諸島に大西洋の最高峰といわれるピコという独立峰があります。一度出張でその姿を見てから登りたいなあと思っておりますが、なかなか実現せず、どなたかを牽引車にしたい感じです。基本的に亜熱帯に属する島ですが、同峰は冬には雪を頂くようです。「大西洋の最高峰」ですよ。ご興味ございましたか？

白川 隆夫（昭30卒）

私は心電図異常ということで、専ら国内のパック旅行です。礼文島から西表島まで行きました。

会務報告

●行事

新年会 2月3日午後6時30分より

如水会館14階記念室東にて。

今回は立食形式でおこなうことになった。

●会員名簿

昨年11月末に暫定名簿を会員に配布しました。記載内容に修正などがありましたら、総務幹事・古田宛にご連絡ください。

古田 茂Ⅱ東京都港区赤坂3-11-3

赤坂中川ビル4F

本間・小松法律事務所

電話 03・5570・3270

FAX 5570・3280

原稿募集

次ぎの号は6月の総会にお渡しできるようにしたいと思っております。5月連休の山行などの原稿を期待しています。お気軽に寄稿してください。原稿締め切りは5月15日です。

編集子より——高野さんの追悼文に添えるお写真を拝借するために、ご遺族に連絡をとったところ、ご長男・行雄氏より写真とともに告別式の際の挨拶文が送られてきました。高野先輩を偲ぶよすがとして、ここに掲載させていただきます。また別便にて、ご婦人・鈴子様より寸志として3万円を会にご寄附いただきましたことを併せてご報告いたします。

父のこと

高野行雄

父は大正10年、祖父母の創業の地であります神田佐久間町に生まれ、下町のたくましさや身につけたようであります。13歳のときに別宅をこの江古田に建てて移り住み、一生のすみかとなりました。想像もできませんが自然に溢れたこの地で、下町とは打って変わり、読書、山、後年は野鳥等（バードカービング、日本野鳥の会）をこよなく愛してまいりました。この間、趣味の切手収集を通し、海外の友人との文通、友人との交際等をとぎらせることはございませんでした。

今、父の書斎の机の上には大岡昇平の本が

開かれ、入院前日までつづけた途上の要約が残されており、父の旅の伴には『日本人とは何か』『文藝春秋』が母によって選ばれ（棺の中に納められ）ました。

さて、（父が亡くなる3週間前）私が仕事よりアメリカから戻りまして、（父と一緒に）墓参りに出かけました。お昼は不忍池のたもとで久しぶりに「うなぎ」に舌鼓を打ちました。父は俺の生まれた所に行きたいと言いつつ出しました。

「神田川的美倉橋のたもとに『交番』がある。まずそこへ行こう」。

様変わりしていましたが、佐久間町4丁目18番地の電柱の前に写真を撮ることができました。

突然、石井商店を見つけると、通りの向こうを指差し高笑い、「何十箇、卵割ったかなあ……そのたびに母に引っ張られてあやまりに行つたものだ」。交番を覚えている理由と、父の終りが近いのを悟りました。

父は一昨年秋に肺がんの告知を受けておりました。絶対入院はしない、自分の身体にメスは入れさせない、動きのとれないアメリカの息子に知られたくない——と、両親でたんと生活を続けておりました（十数年前に夫婦で尊厳死協会会員になっていた）。私ども子供達がそれを伝えられたのが2、3週間

前、入院は先週の木曜でありました。

臨終の日、十数年来の同志でありました中野慈生会病院の院長が病室に來られ、にこやかに落ち着いた表情で

「高野さん、あなたのシナリオ通りだね、オメデトウ」

二人はほほえみながら握手をしました。4時間後、静かに息を引き取りました。

父をここまで強く育て、支えつづけていただきましたご友人の方々の熱い思いにあらためて感謝申し上げます。
（抜粋）



昭和30年5月、旧山岳部部室の前で次男坊と

編集後記

● 本号の編集作業の後半に入った頃、昭和12年卒業の柿原先輩が1月16日に亡くなられたとの知らせを受けました。謹んでご冥福をお祈り致します。同先輩と親しかった方々からの追悼文を次号に予定していますので4月末までに会報幹事宛原稿をお送り下さい。

会報編集の仕事をはじめ引き受け、現在は会報完成までの大部分の作業がコンピューターの力を利用して今更ながら驚いています。そして昨今はその作業の大半が会報幹事の一人、井草君の専門的スキルと個人的努力によって推進されていることを会員諸氏に知っていただきたいと思えます。会報編集には長い間、多くの方が担当されご苦勞を重ねてこられたわけですが、その作業内容が時代と共に、コンピューターが普及するに従ってどう変わってきたのか？について興味を感じている今日この頃です。 (佐薙)

● 昨秋、亡くなられた藤巻さんは、私と同じ年でしたが一年先輩で、何回も一緒に山へ行ったものでした。北海道で育まれた頑健な身体をもった人だったのに、ある日突然、パソコン画面にその知らせをみて、愕然としました。卒業後しばらくして札幌に戻られ、風の噂を時々聞くだけとなってしまったままで

した。あらためてご冥福をお祈りいたします。

高野先輩はバードウォッチングをなさっていたようですが、会報のことで佐薙さんに半蔵門にあるわが事務所までおいでいただいた時も、ついでにお濠の鳥を観て行くんだよとのことでした。私は、鳥を眺めるだけのどこが面白いんだと密かに思っていたのですが、つい先日、環境庁の全国一斉調査とやらの助っ人に狩り出され、寒い中、双眼鏡を手に家の近所(所沢郊外)を回ってカモを勘定してましたが、これが思ったより面白いことを知りました。山登りだけではなく、そうした自然に触れる楽しさ面白さを伝えるお話が沢山あるのではないかと思えます。そういうのもどんどん原稿にして送ってくださいませんかねえ。 (井草)